

木育子育て支援施設における父親の人・モノとの かかわりの特性

Characteristics of Fathers' Participation in "Mokuiku" Child-Rearing Facilities

渡 邊 由 恵

Yoshie WATANABE

1. 研究の背景と目的

木育は北海道と道民で構成される木育推進プロジェクトチームにより生成された言葉であり、「子どものころから木を身近に使っていくことを通じて人と、木や森とのかかわりを主体的に考えられる豊かな心を育むこと（木育推進プロジェクトチーム、2004）」を目的とした取り組みである。その基本理念は、「木育とは、子どもをはじめとするすべての人が『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取り組みです。それは子どものころから木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森とのかかわりを主体的に考えられる豊かな心を育むことです（煙山他、2008）」と述べられている。国全体の取り組みとしては、「森林・林業基本計画（2006年9月）」に「木育」という言葉が明記された。

木材利用の効果として、浅田ら（2012）は、鉄筋コンクリート造校舎、木造校舎、内装木質化校舎など、様々な校舎で過ごす児童・生徒の心身の状態について調査を行っている。その結果、気持ちが落ち着かない、やる気が出ないなどのストレス反応・行動の訴え率が、校舎内の木質率が高い学校ほど低いということが明らかとなっている。同調査による小中学校の教師へのアンケート調査では、木質率が高い学校に勤務する教師ほど、児童・生徒に対して、落ち着きがある、穏やか、明るい、といったイメージ（児童観・生徒観）を持っていることも報告されている。また、安梅ら（2012）は、保育に携わる専門職8名を対象にフォーカス・グループインタビューを実施し、保育施設における内装木質化の効果を検証している。その結果、内装を木質化することにより、木の香りに子どもが歓声をあげる、子どもの声がよく聞こえる、裸足でも暖かいなどの「五感で感じる変化」、滑り止めの必要がなくなった、子どものたんこぶが減った、喘息がない、綿埃があまりないなどの「日常生活における変化」、子どもが話を落ち着いて聞いてくれる、暴れる子どもがいないなどの「かかわりに見られる変化」という効果があったことが報告されている。

これらの調査は学校や保育施設において内装や設備に木材を積極的に取り入れることが、子どもの心身両面に効果的な影響をもたらすことを示唆するものである。

子どもにかかわる施設には、学校や保育施設の他に、子育て支援施設があげられる。子育て支援施設は、実施主体や事業内容等多岐にわたっており、地域子育て支援拠点のような公的な施設から、本研究の調査対象のような民間団体が独自に開設しているものまでさまざまである。昨今の核家族化や地域のつながりの希薄化などの社会問題により、子育ての不安や悩みを抱える保護者も多い。子育て支援施設はそのよう

な保護者が、子どもを遊ばせたり、他の親子と交流をしたり、時には子育ての悩みを相談することなどを目的とした施設である。子どもが学校や保育所のように長時間を過ごす場ではないが、子どもにとって保護者と共に遊び、保護者と共に人やモノとかかわる場所でもある。

育児において、まずは家庭での生活が基盤となるが、昨今家庭や地域の育児力の低下、地域の人間関係の希薄化などの諸問題もあり、育児が孤立化し、不安を持つ保護者も多い（厚労省、2007）。そのような状況が生じている現在、子どもの発達に対しての専門的な知識や、育児の参考となる助言を得ることができるよう、保育所や幼稚園、子育て支援施設等に地域の子育て支援のセンターとしての責務が課せられている。子育て支援施設は、特にまだ言語で自分の意思を伝えることが難しい0～2歳児を持つ家庭においては、保護者の意思で施設を選択し利用することが多い。子育て支援施設では、保育所や幼稚園と違い、親子で共に過ごすことにより、保護者が家庭とは違う環境の中で子どもの遊ぶ姿、様々な人やモノとのかかわりを通して、子どもに対して何らかの気づきや実感を保護者に与えるのではないだろうか。

金山（2005）は、上越市の子育て支援施設において、男性の利用状況を半年間（4～9月）に渡って調査している。その結果、女性において平日の1日あたりの利用者数は104人、土・日・祝日は122人であり、男性の利用者数は、平日1日あたり15名、土・日・祝日においては59人と平日の約4倍の利用があったことを報告している。この結果より、男性は平日に比べ、土・日・祝日の子育て支援施設の利用が多いことが明らかとなっている。

近年社会では、育児に積極的な父親のことを「イクメン」と呼ぶことが定着してきている。厚生労働省は、夫の家事や育児の時間が長いほど、第2子の出生割合が高いという調査報告（厚生労働省、2011）を受け、父親がさらに育児に積極的にかかわること、また育児休業取得の推進を目指し、様々な取り組みを行っている。具体的には、男性の育児休業取得率を現状の2.65%から、2019年度には10%、2022年度には13%に上げることなどを目標とし、「イクメンプロジェクト」のインターネットサイトを立ち上げるなど、その周知や推進を図っている。このような男性の積極的な育児参加を推進する社会の動向も、「イクメン」と呼ばれる父親を増やしていることの一助となっていると考えられる。

ベネッセ教育総合研究所（2014）は、父親の家事・育児に対する自己評価は上昇傾向にあり、また父親の8割以上が毎日子どもについて妻と会話をしていると報告している。しかし、それと同時に子どもとの接し方に自信が持てない父親も増える傾向にあることも明らかとなっている。清水（2005）は、父親の育児に伴うストレスの要因として、「子どもの自己本位な特性」が最も多く、次に「育児への自信のなさ」があげられると述べている。また、父親とは子どもに対して無償の愛を与えるものだというような育児信念を肯定する傾向のある父親ほど、不安傾向が高まるということを示唆している。福丸（2016）は、先述のベネッセ教育総合研究所の調査の結果を踏まえ、子育てに参加するからこそ父親も不安を抱くとし、子育てには正解はなく、どの家庭も悩みを抱えながら子育てをしていること、また子どもを受け入れる楽しさを知ってもらうことが父親の子育てを支えるために必要であると述べている。

井桁（2015）は、父親は女性のように妊娠出産を経験して親になることが不可能なため、自身の身体を通して親を実感できないからこそ、生活実感が大切であると述べている。生活実感とは、生活を通して子どもの成長を実感するということである。また、初めは義務や責任感から子育てにかかわっている父親が、長期的にその姿勢を保つためには、子育てがおもしろいからかかわりたいという内発的動機付けが大切であり、そのことで父親の子育てに対するモチベーションを高いままに維持できるのではないかという見解も示している（井桁、2015）。

本研究の調査対象である木育子育て支援施設Bは、名称に「木育」が掲げられてるるように、木育をコンセプトとしており、内装・玩具等の設備や備品に木材を積極的に取り入れている。床は30mmの国産杉材、壁やベンチ、遊具などにも多くの国産杉材が使用されており、親子で木のぬくもりのある環境でのんびりと遊んでほしいという趣旨で認定NPO法人により開設された。

そのような趣旨を持ち、木育をコンセプトとした子育て支援施設に来場する保護者は、どのように人やモノとかがわっているのか、またそのかかわりが保護者に何をもちあわしているのかを明らかにすることにより、親子の遊び環境としての木育子育て支援施設の有り様や存在意義を検証したいと考えた。そこで、本研究では、研究の第一段階として木育子育て支援施設 B に来場する父親に着目し、父親自身がどのように人（子ども・母親・他の来場者・施設スタッフ）やモノとかがわっているのか、そのかかわりの特性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) 調査対象

A市にある木育をコンセプトとした木育子育て支援施設 B（写真①）に来場した親子13組を対象とした。本施設の経営母体は認定 NPO 法人で、赤ちゃんからお年寄りまでが人と出会い、遊びを通して文化を知ることが目的とした美術館（6 か月児から入場料が必要）である。木育子育て支援施設 B はその美術館内にある 1 室で、美術館内の他の施設利用に年齢制限はないが、この部分のみ 0～2 歳児を対象としている。開設当初は開館時間内であれば何時間でも利用できたが、年々来場者が増えたことにより、現在は一家族 1 日 1 回 90 分間の利用となっている（その他のエリアは 1 日利用可能）。これは、木育環境の中で来場する親子がゆっくり遊ぶことができるという施設側の意向である。



写真① 子育て支援施設 B 内部

調査対象は、子どもが自らの意思で移動可能な発達段階の乳幼児とその保護者（父親）とした。今回、消極的な参与観察を用いてデータ収集をしており、対象者にはインタビュー等行っていないため、親子共に年齢は不明であるので事例には子どもの発達段階を記している。

(2) 調査方法

2015年3月、5月にそれぞれ2日の計4日間、木育子育て支援施設に来場する親子の入室から退室までの人・モノへのかかわりについて消極的な参与観察を行った。4日間共、父親の来場が見込まれる土・日曜の休日を対象としている。本研究は、施設内での父親の人（子ども・母親・他の来場者・施設スタッフ）やモノへのかかわりの特性を明らかにすることを目的としているため、対象者の自然な姿をとらえられるよう、消極的な参与観察を用いている。観察時間は1日につき1時間～4時間程度である。筆記による記録を基にフィールドノートを作成した。

(3) 分析方法

本研究は、木育子育て施設 B に来場する父親に着目し、父親がどのように人（子ども・母親・他の来場者・施設スタッフ）やモノとかがわっているのか、そのかかわりの特性を明らかにすることを目的とするものである。そのため、データが意味するものをコードとして立ち上げ抽出していく、帰納的アプローチを採用した。

分析の手順として、まずはフィールドノートの記述を、研究対象の父親が人（子ども・母親・他の来場者・施設スタッフ）やモノにかかわっている行為ごとに区切った。次に、それぞれの行為について、父親が何にどのようにかかわっているのかという視点で意味単位ごとにオープンコーディングを行い、コード

を付していった。その後、オープンコードを整理分類し、より抽象度の高い軸足コードを抽出し、最後に軸足コードを整理分類し、カテゴリーを生成した。

(4) 倫理的配慮

本研究は木育子育て支援施設Bの責任者に研究の目的、内容、方法、倫理的配慮、研究中および研究後の対応について説明を行い、了承を得た上で同意書を取り交わしている。

3. 結果と考察

帰納的アプローチを用いて分析した結果、209の事例から47のオープンコードと11の軸足コードが抽出された。軸足コードを分類した結果、『子どもの興味へのアプローチ』、『子どもの心情へのアプローチ』、『子どもの育ちへのアプローチ』、『施設環境へのアプローチ』という4つのカテゴリーが生成された(表2)。

※以下、『』をカテゴリー、【】を軸足コード、《》をオープンコードで示す

(1) カテゴリーI『子どもの興味へのアプローチ』

このカテゴリーは【子どもの興味を知るための直接的なかかわり】【子どもの興味を知るための間接的なかかわり】【子どもの興味を確認するための後追い】【子どもの興味を継続させるためのかかわり】という4つの軸足コードで構成されている。

〈軸足コードI-1【子どもの興味を知るための直接的なかかわり】〉

※事例内の___はオープンコードを示す事例部分

軸足コードI-1は、父親が子どもに対して、モノを見せたり、子どもを連れて場所を移動するなど、直接的な働きかけをする父親のかかわりのオープンコードで構成されている。

事例1：K親子(つかまり立ちをする女兒・父親・母親)

父親は女兒を抱っこして、棚や箱に入っているおもちゃを見ながら糸引きゴマ(写真②)の入っているたらいの前で立ち止まり、コマを手にとって女兒に見せる。《I-1-③》女兒が手を伸ばして触ると、父親はコマの入っているたらいを棚から下して床に置き、その前に女兒を座らせる。



写真②

この父親は、入室した際入り口で立ち止まり、「わああ」と言いながら室内を見渡していたことから、初めて来館したことが伺える。子どもがまだ歩けないため抱っこして室内を見て回りながら、自分が目にとめたモノを子どもに見せているが、子どもが手を伸ばして触ったことで、子どもが興味を持ったと判断し、その場に足を止め遊びの場を作っている。父親が子どもの興味を探りながらかかわり、子どもの反応を見ながら、その興味を知ろうとしていることが伺える。その中には事例1のように子どもがじっと見つめる、手を伸ばす、真似をするなどの、そのモノに対する興味を示す反応もあれば、嫌がったり、目をそらしたり、興味を示さない反応もあった。父親の多くは、それぞれの反応に応じたかかわりをしており、興味を

表1. 父親のかかわりの特性

カテゴリー	軸足コード	概念	オープンコード
子どもの興味へのアプローチ	I-1 子どもの興味を知るための直接的なかかわり	子どもの興味を知るために、自ら積極的に子どもにかかわる	I-1-① 玩具を使って遊んで見せる
			I-1-② 遊ぶ場を選び子どもを連れていく
			I-1-③ 玩具が子どもの目に触れるようにする
			I-1-④ 子どもの様子を見て、新たな場所や玩具に導く
	I-2 子どもの興味を知るための間接的なかかわり	間接的に子どもとかわったり、母の意向に沿うかわりをしたりすることで子どもの興味に知ろうとする	I-2-① 母の意向に沿うように子どもにかかわる
			I-2-② 子どもが自発的に遊ぶ姿を見守る
			I-2-③ 母親と子どもの後を付いていく
			I-2-④ 子どもが移動すると後ろを付いていく
			I-2-⑤ 母と子どもが遊ぶ様子を見守る
			I-2-⑥ 母を介して玩具を手渡す
	I-3 子どもの興味を確認するためのかかわり	子どもの興味を確認するために、子どもの行為の後を追いかける	I-3-① 子どもが目にとめたモノに触れさせる
			I-3-② 子どもの視線を追う
			I-3-③ 子どもが指さした方に連れていく
			I-3-④ 子どもの目線や指さしを追い、子どもに確認する
			I-3-⑤ 子どもの触れたものに触れてみる
			I-3-⑥ 子どもの行動を真似する
I-4 子どもの興味を継続させるためのかかわり	子どもがしていることが保障・継続されるように、子どもに働きかけたり、周囲の状況から守ったりする	I-4-① 子どもの遊びを援助する	
		I-4-② 子どもが触れたモノを介して子どもに働きかける	
		I-4-③ 周囲の状況に応じて子どもを他に導く	
		I-4-④ 子どもが危なくないように対応する	
		I-4-⑤ 子どもの遊びが続けられるように他児に対応する	
子どもの心情へのアプローチ	II-1 子どもの心情に対する応答的なかかわり	子どもから発せられた感情や反応を受け止め、心情に寄り添う対応をする	II-1-① 自分に向けられた子どもからの働きかけに応答する
			II-1-② 子どもの不快感を受け止め対応する
			II-1-③ 子どもの反応に応じたかかわりをする
	II-2 子どもの心情を確認するためのかかわり	子どもの心情を確認するために、表情を読み取ったり、言葉をかけたりする	II-2-① 子どもの気持ちを、表情を見守ったり言葉をかけたりして確認する
			II-2-② 子どもの様子・表情を見る
	II-3 子どもの意思を尊重するためのかかわり	子どもの意思を大切にするために、待ったり確認したりする	II-3-① 子どもに次の行動を伝えてから行動に移す
II-3-② 子どもが自ら行動するのを待って次の行動に移る			
II-3-③ 子どもの行動を最後まで見守る			
子どもの育ちへのアプローチ	III-1 子どもの育ちへの母親との共感	母親と子どもの姿から子どもの育ちを確認し合う	III-1-① 母親と子どものことについて話す
			III-1-② 母親と子どもの姿を見て笑いあう
			III-1-③ 母親と子どもの様子を確認しながらモノに触れさせる
	III-2 子どもの育ちへの気づき	子どもの姿を見たり、他者の子どもへのかかわりを見たりして、子どもの育ちに気づく	III-2-① 子どもができたことをほめる
			III-2-② 子どもができたことに気が付き喜ぶ
			III-2-③ 子どもの行動を言葉で表現する
III-2-④ 他者の自分の子どもへの働きかけを見たり・聞いたりする			
施設環境へのアプローチ	IV-1 親としての周囲に対する配慮	親としてその場でのふさわしい配慮をする	IV-1-① 子どもの行動が周囲に影響しないように対応する
			IV-1-② 周囲の人からの子どもへの配慮にお礼を言う
			IV-1-③ 周囲の状況に応じた対応をする
			IV-1-④ 遊んだ玩具の始末をする
	IV-2 施設環境に対する自らの興味に戻づく働きかけ	施設内のモノに自ら触れたり、教えられたり、確認することで、施設環境に興味を持つ	IV-2-① 自ら玩具で遊んでみる
			IV-2-② 遊具・玩具に触れ、感触を確かめたり言葉で表現したりする
			IV-2-③ 他者から遊び方を教えてもらう
IV-2-④ 木育に関する資料を読む			
IV-2-⑤ 母親に玩具について確認する			
IV-2-⑥ 母親からの働きかけでその玩具について知る			
IV-2-⑦ 母親と施設についての話をする			

示さなければ次のモノを探すといった行動が見られた。しかし、《遊ぶ場を選び子どもを連れていく》の中には、子どもが遊びを中断されたことにより、不快な声をあげたり、背中をそらせたりするなど嫌がる行為をしても連れていく事例も見られた。子どもの興味を無視しているわけではないが、「あの遊具で遊ばせたい」というような父親自身の思いの方が強く働いたことにより、子どもの思いとずれが生じたのであろう。

〈軸足コード I-2 【子どもの興味を知るための間接的なかかわり】〉

この軸足コードは、父親自らが子どもにかかわるのではなく、《子どもが自発的に遊ぶ姿を見守る》《子どもが移動すると後ろを付いていく》など、子どもの姿を後ろから追いかける事例や、《母の意向に沿うように子どもにかかわる》などの直接的ではないかかわりをする事例で構成されている。

事例2：H親子（ずり這いをする男児・父・母）

母が父に卵プール（写真③）を指さしながら「あっち」と言う。父、男児を抱っこして卵プールの中に座らせる。《I-2-①》母、スマホで写真を撮る。男児は卵を握ろうとするが、母、写真を撮ると男児を抱っこして右側の柵に移動する。父は二人の後をついていく。《I-2-③》



写真③

この事例の母親は入室した際、ビデオとスマートフォンを持っており、子どもの写真を頻繁に撮っていた。閉館間際だったこともあり、とにかく写真を撮りたいという思いが行動に表れていたと推察される。この事例の父は、母親の意向に沿うかかわりをする中で、また子どもを連れて次々に場所を移動する母親の後を追ったり、子どもの姿を見たりすることが、子どもの興味を知るきっかけとなっている。子どもは移動する際、遊びを中断されて不快感を示すこともあり、そのような姿を見ることが子どもの興味を知るきっかけの一助となっている。この軸足コードの多くの事例が、このように子どもの反応を見ながら子どもの興味を探ろうとしていることが見て取れるものであった。

（2）カテゴリーⅡ『子どもの心情へのアプローチ』

このカテゴリーは、【子どもの心情に対する応答的なかかわり】【子どもの心情を確認するためのかかわり】【子どもの意思を尊重するためのかかわり】という軸足コードで構成されている。

〈軸足コードⅡ-2 【子どもの心情を確認するためのかかわり】〉

この親子（事例3）は約48分滞在したが、女兒が最初にカエルの積木を崩したときは親子が退室する10分ほど前であった。女兒が2回目に積木を崩した際、父親はそろそろ子どもが飽きているのかもしれない、ということを感じ、「お片付けする？」という言葉かけたことが推察される。女兒がその言葉を受け、父親と一緒にカエルを片付ける様子を見て、女兒の気持ちを理解したのであろう。その理解が、その後女兒が移動し車を片付け終わったところでの「もう行く？」という問いかけにつながったことが推察される。父親の子どもへの働きかけが、子どもの心に沿うものであったことが、女兒が父親と手をつなぐという行為に現れている。

事例3：J親子（一人歩きをする女兒・父親・母親）
 父と母がカエルの積木（写真④）を積んでいると女兒が崩す。父が黙ってまた積み始めると女兒は横から手を出した崩し、手を止めて父親の顔を見る。父は笑いかけながら「お片付けする？」と問いかけカエルを箱に並べて入れると、女兒も同じようにカエルを箱に並べて入れる。《Ⅱ-2-②》全部片付けると女兒は移動棚（写真⑤）に行き、木の車を出す。全部車を出し、並べると棚に戻し始める。父は、女兒の後ろに座りその様子を見ている。女兒は車をすべて棚に戻すと振り返り、父親の顔を見上げる。父が「もう行く？」と問いかけると、女兒は答えないうがすっと立ち上がり、父と手をつなぐ。



写真④



写真⑤

この事例のように、父親自身、あるいは周囲の環境や状況に向けられた子どもの喜怒哀楽の感情や意思について、子どもの表情や態度から、また言葉をかけて確認しながら理解し、柔軟に受け止めようとする様子が見られた。休日の遊び場として選んだ環境の中で、子どもが心地よく過ごすことができるようにという配慮が、子どもの心情に寄り添うことに繋がっていると考える。

〈軸足コードⅡ-3【子どもの意思を尊重するためのかかわり】〉

事例4：L親子（よちよち歩きをする男児・父・母）

母が荷物を持ってプールに来る。父、男児を抱っこすると脚をバタバタさせる。抱っこしながら「○○（男児の名前）上に行こう」と上を指さすと男児も人差し指で上を指さす。父「そう上」という。《Ⅱ-3-①》男児足をばたつかせることなく抱っこされて退室する。

この事例の父親は、子どもの脚をバタバタさせるという行為から、まだ子どもが遊びたいという意思を持っていることに気が付いている。体で不快感を示しても小さな子どもであるので、抱きかかえて退室することは可能である。しかし、子どもに次の行動を伝え、子どもが納得したことを確認してから次の行動（退室する）に移っている。軸足コードⅡ-3は、《子どもに次の行動を伝えてから行動に移す》《子どもが自ら行動するのを待って次の行動に移る》《子どもの行動を最後まで見守る》というオープンコードで構成されているが、いずれのコードも子どもの意思を尊重するために、「待つ」ということが共通している。子育て支援施設の滞在時間は、1日のスケジュールや次の予定など大人の都合が影響している。子どもがまだ遊んでいても帰らなければならない事情もあるが、子どもにとっては、興味を中断されることにもつながり、帰り際に不快感をあらわす姿も多くみられる。その場を離れなければならないことは、子どもにとっては大人の都合であること、また子どもが遊びを中断させることを父親が意識しており、言葉でこの後のことを伝え、子どもに不快感を与えないようにという配慮が見て取れる。

この軸足コードは、言葉で自分の意思を伝えることがまだ難しい0～2歳という年齢の子どもに対し

て、子どもの心情に寄り添おうとする父親の意識が表れていることが特徴である。

(3) 子どもの育ちへのアプローチ

このカテゴリーは【子どもの育ちへの母親との共感】【子どもの育ちへの気づき】という軸足コードで構成されている。

〈軸足コードⅢ-1【子どもの育ちへの母親との共感】〉

事例5：B親子（高這い、つかまり立ちをする女兒・父・母）

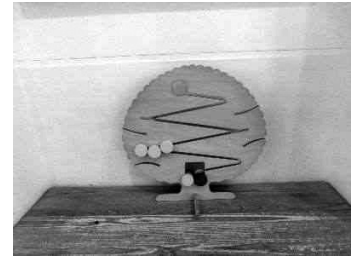
女兒はカゴの外に卵を落とし始める。母「入れ物から出したいのかな。洗濯物こんなのに入れてたらいつもこうする」とポイポイと中身を出すようなしぐさをする。父、「うんうん」と言いながらうなずいている。《Ⅲ-1-①》

観察中は他の来場者もいるため、混雑している時は父親と母親の話している声が聞こえないこともあり、事例数としては多くはないが、子どもの姿を見ながら、夫婦で子どもの育ちについて話す姿が見られた。日頃の子どもの様子や興味を踏まえ、家庭とは違う環境の中での子どもの姿から、子どもの育ちを確認していることが読み取れる。

〈軸足コードⅢ-2【子どもの育ちへの気づき】〉

事例6：M親子（ずり這いをする男児・父・母）

その後、ステージの方に行きリンゴの木（写真⑥）の前に男児を座らせる。父は男児の後ろに座る。母も横に来て座り、リンゴの木を支える。父がリンゴを入れる。リンゴはゆっくり落ちていくが、途中で止まっているリンゴにあたり止まる。父は指で一番下にあるリンゴを下まで落とす。《Ⅰ-1-①》男児リンゴを掴んで動かし、下まで持ってくる。父、男児の顔を見ながら頭をなで《Ⅲ-2-①》、リンゴを入れ、途中で止まるようにする。男児はまたリンゴを触り下までおろす。男児がリンゴを落とすたびに、父親は男児の頭をなでる。《Ⅲ-2-①》



写真⑥

これは、父親が途中で止まったリンゴを手で下すという《玩具を使って遊んで見せる》かかわりにより、男児が真似をして「できた」ことに気が付き、頭をなでるという行為で褒めている事例である。この事例のように子どもの「できた」ことに気が付き、頭をなでたり、喜んだりする姿がみられた。この施設の玩具は、電動で動くものは1つもなく、人が自らかかわることで初めてそのモノが動く。木育子育て支援施設Bには、このリンゴの木のようにシンプルな作り物が多く、幼い子どもにとっては、容易に動かすことができ、また出す・入れるなど単純な行為で扱う玩具ばかりで、子どもが自分の意思で動かすことが可能である。それと同時に子どもが「できた」ということが親にとってもわかりやすく、自分の子どもの育ちに気付くことができる。子どもにとっても、自分が興味を持って行った行為が褒められるということは、楽

しさだけではなく、満足感を味わうこともできるのではないだろうか。

家庭とは違う環境の中で子どもの姿を見ることで、子どもの育ちに気付いたり確かめたりする機会となっている。

(4) 施設環境へのアプローチ

このカテゴリーは【親としての周囲に対する配慮】【施設環境に対する自らの興味に戻づく働きかけ】という軸足コードで構成されている。

〈軸足コードIV-1【親としての周囲に対する配慮】〉

事例7：M親子（ずり這いをする男児・父・母）

じゃぶじゃぶの池の中で、男児が遊んでいる他児に近づいて触ろうとすると父が後ろから抱っこして男児の体の向きをかえ笑顔で男児の顔を見る。《IV-1-①》男児も笑う。父、室内を見まわしながらトンネルを指さしながら歩いて行く。

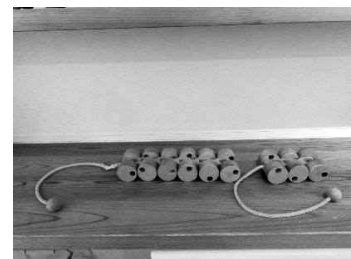
子育て支援施設は公共の施設であるため、他の来場者とその場を共有する必要がある。この事例は、父親が他の来場者（遊んでいる他児）に子どもが近づこうとしていることに気が付き、他児の邪魔にならないようにかかわっている。子どもにとっては他児が興味の対象であり、だからこそ近づいていくのだが、そのことにより他児の遊びの邪魔をするというような影響を考え、子どもの行為を止めている。しかし、この事例は子どもの心情を考え、子どもに不快感を与えないように、笑顔で顔を見たり、他の遊具を示したりして、子どもの興味をさりげなく他に導いている。この事例だけではなく、多くの保護者が自身の子どもの行為が周囲に影響を与えないようにしたり、また子どもが遊んでいるところに他児が来たら譲る配慮をしたりする姿が見られた。これは公共の場で親としてどのようにふるまえばよいのか、という意識の表れである。家庭内のように自由にふるまうことが難しい環境において、子どもの興味を保障しつつその状況に応じた配慮をするという、親としての配慮について学ぶ機会となっている。

〈軸足コードIV-2【施設環境に対する自らの興味に戻づく働きかけ】〉

このコードは【自ら玩具を使って遊んでみる】【遊具・玩具に触れ、感触を確かめたり言葉で表現したりする】【木育に関する資料を読む】どの軸足コードで構成されている。

事例8：G親子（お座り・高這いをする男児・父・母）

父、棚から引き車（写真⑦）をおろし、男児の前でひもを引いて動かして見せる。引き車が形を変えることに気が付きいろいろ試してみる。パーツが多い車にかえて「すごい」と言いながら形を変えて動かす。IV-2-①



写真⑦

これは子どもに見せようと思って手に取った玩具が、思いもよらぬ動きをすることに気が付き、父親自身が楽しんで遊んでいる事例である。母親の分析をしていないので明言はできないが、母親よりも父親の方が玩具で遊んでみるという姿が多く見られた。施設やそこにあるモノに興味を持っているからこそ、まずは自分が試してみようという意識が玩具で遊ぶという行為に表れている。この事例のように子どもに見せようとして目に留めたモノに興味を持ち遊ぶだけでなく、まずは自分が遊んでからそのモノの性質やおもしろさを理解した上で子どもに触れさせる様子も数名の父親に見られた。また、1事例ではあったが、自身が遊んでいるものを子どもに崩されないように、さりげなく守るという姿も見られた。この事例では父親が母親から「子どもより一生懸命だね」という言葉をかけられている。父親自身が環境に興味を持って遊ぶことは、子どもや母親もその環境に興味を持つきっかけになるなどの影響を与えることが推察される。

4. まとめと今後の課題

今回の調査では、木育子育て支援施設Bでの父親の子どもやモノとのかかわりの特性として、『子どもの興味』『子どもの心情』『子どもの育ち』『施設環境』にアプローチをしているということが明らかとなった。今回の調査で見られた父親のかかわりの多くは、特に子どもに寄り添った丁寧なものであった。これらのかかわりは、直感的ではなく、子どもの姿をよく見て、よく聴いて判断しようとするもので、父親が子どもや環境、そして子どもと母親のかかわりをよく観察しているからこそ表出したものである。また、積極的には子どもにかかわらず、母親の後をついていく父親の姿も見受けられた。直接的にかかわらなくても、母親のかかわりに対する子どもの反応を見て、子どもの興味や心情について理解をしようとしていることも読み取れた。

調査対象である13組の親子はそれぞれ、子どもの発達段階も異なっており、発達段階により父親の子どもや周囲の状況に対する働きかけは変化すると考えられる。しかし、それぞれの子どもの発達や家庭環境は異なっている、家庭内での子どもとのかかわりから得ている経験を基盤としつつ、家庭とは違う環境や空間、家庭にはないモノにかかわること、その場で子どもとかわることが、父親に新たな子ども理解をもたらしていると考えられる。

今回の調査では、父親が入室の際立ち止まり、笑顔で、あるいは「わぁ」という言葉と共に室内を見まわす、まずは自分が遊んで子どもに玩具を手渡すなど、父親自身が施設内の環境に興味を持っている様子が見られた。父親の子育てに対する長期的な責任感や姿勢を保つためには、おもしろいからかわりたいという内発的動機付けが大切であると井桁が述べているが（先述）、子どもの遊び場としての施設Bの環境やそこでの子どもの姿がその内発的動機付けをもたらす一助となりえるとも考える。

今回、木育子育て支援施設Bでの父親の人やモノへのかかわりの特性が明らかとなったが、この特性は1施設のデータに過ぎない。昨今、木育子育て支援施設B以外にも、木育をコンセプトとした子育て支援施設や、内装を木質化した子育て支援施設、木の玩具を豊富に揃えた子育て支援施設も増えてきている。そのような子育て支援施設においても、木育子育て支援施設Bと同様に、父親のかかわりの特性が見られるのか、今後調査が必要である。また、木育をコンセプトとしない施設においても同様の調査を行い、木育子育て支援施設と比較することで、木育子育て支援施設が父親の子育てにどのような影響を与えているのか検証することができると思われる。

謝辞

本研究にあたり、調査を快諾してくださった木育子育て支援施設Bのスタッフの皆様、ご指導くださった西南学院大学大学院人間科学研究科門田理世教授、多くの助言をくださった門田ゼミ生の皆さまに心から感謝申し上げます。

参考文献

- 浅田茂樹（2013）「子育て世代の支援施設としての『赤ちゃん木育ひろば』の機能と役割に関する調査報告書」
- 井桁容子（2015）「保育でつむぐ子どもと親のいい関係」小学館
- 金山美和子（2005）「男性の育児を促進する子育て支援の検討（2）：地域子育て支援の利用状況調査から」上田女子短期大学紀要 28
- 煙山康子、西川栄明（2008）「木育の本」北海道新聞社
- 厚生労働省（2007）「地域子育て支援拠点事業実施のご案内」厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室
- 厚生労働省（2011）「第9回21世紀成年者縦断調査」
- 厚生労働省（2017）「平成27年度雇用均等基本調査」
- 清水嘉子（2006）「父親の育児ストレスの実態に関する研究」長崎県看護大学小児保健研究第65巻第1号
- 認定特定非営利活動法人日本グッド・トイ委員会（2012）「木造効用建築物等への地域材利用による実需拡大 木材利用効果の研究推進 最終報告書」
- 浅田茂裕：学校の木質化と児童・生徒・先生の意識・行動とのかかわりの調査
- 安梅勅江：高齢者施設・保育施設の木質化、木材利用効果の調査
- 認定特定非営利活動法人日本グッド・トイ委員会（2013）「幼児の心と体を育むはじめての木育」黎明書房
- 認定特定非営利活動法人日本グッド・トイ委員会（2013）「赤ちゃんからはじめる木のある暮らし」幻冬舎
- ベネッセ教育総合研究所（2014）「第3回乳幼児の父親についての調査」
- ベネッセ教育総合研究所（2016）「これからの幼児教育」